

「記・紀」により、封印された邪馬台国と葬られた出雲の国が、今蘇える

全④-3

社会医療法人 緑泉会米盛病院
「邪馬台国 in 南九州」を探究する会 会長

濱田 博文

「魏志倭人伝」を以下、「倭人伝」と略。

【 】は「倭人伝」の読み下し文。

() は著者の注記。

10. 日霊女(卑弥呼)の誕生とその資質

AD153 年頃、「日向の橘の小門の阿波岐原アワキハラ (現存)」(図 17) で、豪族イザナギ・イザナミの娘として誕生した。「(「記・紀」では神話に造作してある)。素戔鳴より 35 歳くらい若い。

日霊女は、相当に男まさりで利発。他に子供がいなかったので、イザナギは自分の跡目を日霊女に託した。日霊女はシャーマンの要素も持っていただろうが、決して妖しいシャーマンではなかった(後述)。



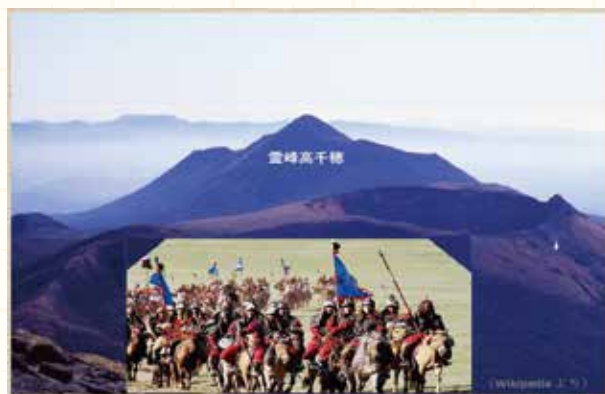
(図 17) 日向の橘の小門の阿波岐原(松林の中にある江田神社の管理)

11. 素戔鳴の九州平定

AD 173 年頃、素戔鳴スサノヲは 50 歳過ぎ、第五子の大歳ニギハヤヒ(後の饒速日)を伴い、九州へ遠征(後漢書=「桓・霊帝時、倭国乱れる」、梁書=霊帝の時 178 -183、倭国大乱)。

日向ヒムカの国は、山川、国分、志布志、油津、日南、他が江南からの窓口になり、長江文明が早くから伝わり、出雲に次ぐ先進国になっていた(④-2; 図 14 参照)。

しかし、満州・蒙古由来の攻撃性の強い鉄兜、鎧、鉄刀を纏った騎馬軍団には、防御中心の環濠集落は戦うまでもなく、次々に素戔鳴の統治を受けることになった(図 18)。



(図 18) 霊峰・高千穂と出雲騎馬軍団(イメージ図)

出雲の国は、もともと有名な斐伊川ヒイカワの砂鉄を用いた、たたら製鉄と鍛冶が盛んであった。特に現在でもたたら製鉄から得た玉鋼による日本刀作りは盛んである。このたたら製鉄と鍛冶は例の草原の道(図 14 参照)の蒙古・満州経由できたものである。古代の鉄兜、鎧、鉄刀などの武具、工具、農具などの鉄製品は、あえて朝鮮半島南部まで鉄取引に行かなくても(朝鮮経由の中国の製鉄は、より高温が必要な高炉を用いた融解製鉄)、自前のたたら製鉄で作ることができ、騎馬軍団は倭国の、どの国よりも早くから鉄製品を作っていた。

AD180 年、九州の国々(邪馬台国や他の

国邑)は戦わずして素戔鳴の軍門に下り、素戔鳴は弥生時代を謳歌していた日向の西都に都を置き、九州を7～8年間統治した。「記・紀」では、素戔鳴は神話に出てくる悪役に造作されている！)

■ 12. 素戔鳴の人物像

(「記・紀」神話の造作された素戔鳴とは全く異なる！)

出雲の郷土(豪族より低い身分)出身。素戔鳴は素晴らしい魅力のある男性で頭脳明晰、勇猛果敢。142年、豪族ヤマタノオロチを倒した(木次事件)後、本拠地の出雲、占領地の北陸・九州全土で、善政を行い、仁慈の名君と慕われる。素戔鳴尊に始まる出雲王朝は、銅鐸信仰で、ほぼ西日本一帯は緩やかに結びついていった。しかし、その後、「出雲の国譲り」というドラマが待つ

ている(後述)＞

■ 13. 素卑弥呼と素戔鳴

九州侵攻の時、素戔鳴 55 歳、日霊女 23 歳(既に子供が二人あった)。日霊女の方から勇猛・果敢な素戔鳴に接近していった同居した模様(ローマのシーザーとエジプトのクレオパトラに似たパターン)。

そして、現地妻の形で3人の女子；多紀理姫、多岐津姫、厳島(市杵嶋)姫を儲ける(約500年余り後の「記・紀」でいうところの宗像3女神)。その後、3女神を祀っている神社は宇佐八幡宮、春日大社(奈良)、平野神社(京都)、香取神宮(千葉県)など、全国で117社もある。出雲の八重垣神社には、素戔鳴・大日霊女尊・末子相続人の市杵嶋姫の壁画が残っている(図19)。



素戔鳴尊



大日霊女



市杵嶋姫

(図19) ヤエガキ コセタナオカ 八重垣神社の巨勢金岡筆とされる壁画 (Blog.livedoor.jp より引用)

素戔鳴は約8年間の九州統治後、出雲に戻って正妻：櫛稲田姫との間に儲けた末子相続人・須世理姫を残して、63～64歳頃亡くなり、出雲の熊野神社に祀られた。

(注：モンゴロイドの相続は、伝統的に

男女に関らず、末子相続。出雲は北方モンゴロイド、日向は南方モンゴロイドであった；これが、後の「出雲の国譲り」や「神武東遷」に深い影響を与える！)

14. 大国主の尊

素戔鳴の末子相続人である須世理姫^{スセリヒメ}は大国主^{オオクニヌシ}（出自不詳）と恋愛で結ばれ、大国主尊が出雲と九州の広域を統治することになった。

そして、日向では、素戔鳴尊と日霊女^{コノハナサクヤヒメ}の長女：多紀理姫（通称：木花咲耶姫）が成長して、大国主尊が日向に統治に来た時、日向妻として同居するようになった。

この多紀理姫が大国主尊の末子相続人に当たる事代主^{コトシロヌシ}を儲けた。大国主尊は色白・ハンサムで、記紀神話と異なり政治・外交は好きでなく学者風であったとされる。

出雲にいる正妻の須世理姫は、神君・素戔鳴の娘という遠慮があったし、出雲にいる相続人の息子の武御名方^{タケミナカタ}（後の国譲りの時、日向軍と戦って敗れ、諏訪へ追放→諏訪大社に祀られる）は剛毅な気性の素戔鳴似だったので近寄り難かったらしい。日向において、日霊女は良く出来た娘婿として大国主尊を歓待したようである。

大国主は40歳を過ぎても、多紀理姫（通称：木花咲耶姫）と可愛い3人の娘のいる日向の温暖な九州統治生活が気に入ったよ

うである。AD 215 年、大国主は本家本元の出雲に帰らず（異例！）、西都の多紀理姫の許で亡くなった（55 歳頃）。

日霊女は、この娘婿のため、西都原に異例の出雲式の方墳（常心塚古墳；図 20）を造営して葬った（日向の墓制は円墳を基本として→柄鏡式前方後円墳→定型の前方後円墳と発達。後の大和王朝に持ちこまれた）。

さらに、西都から出雲への通路に当たる今の都農町に、大国主のために都農神社（日向の一宮）を建立して祀り、後に多紀理姫は都万神社（図 21）に祀られた。



（図 20）常心塚方墳（西都原 171 号；大国主尊の墓とされる）



（図 21）都万神社（祭神；多紀理姫＝木花咲耶姫）と大国主（右下）

■ 15.「邪馬台国」4代120年間の歴史

ここで、「邪馬台国」4代120年間の歴史を、ひとまず述べておくことにする。

①素戔鳴尊（日本建国の祖）180年九州を平定後、今の宮崎県・西都に都をおき、約8年間統治。当地の豪族の娘、日霊女と約8年間同居して、多紀理姫、多岐津姫、最後に狭依（^{サヨリ}厳島）姫（宗像3女神）を儲ける。その後、出雲に帰り、63～64歳で逝去。松江の熊野山に磐座（^{イワクラ}古神道からの岩を配置した神聖な場）として埋葬され、熊野神社に祀られる。

②大国主尊：素戔鳴尊と正妻の櫛稲田姫（^{クシイナダヒメ}）の末子相続人であった須世理姫の養子となり、出雲・九州を約30年間統治。（この間、大和は素戔鳴尊の五男・大歳改め饒速日尊（^{ニギハヤヒノミコト}）が平定、初代大和の王として統治）。その間、温暖な日向を好み、素戔鳴尊と日霊女との間にできた長女・多紀理姫と同居して、約30年間統治、そのまま日向で逝去。

（①～②；出雲系男性が統治→「記・紀」により神話を造作して葬られた出雲王朝）

③日霊女女王（日本皇祖；後述）：大国主の逝去後、素戔鳴尊と日霊女の上に儲けた末子相続人・事代主（^{コトシロヌシ}）が幼かったので、政務代行をしていたが、なるべくして日霊女は女王に擁立される（215年）。約30年間統治（後述）。この間、「魏国」へ国使派遣や、孫の磐礼彦を政略的に大和国へ養子として送り込み（大和東遷→後述）、大和王朝創設に功績を挙げる（→日本皇祖）。約30年間統治。93～94歳頃、西都で逝去。

④台与女王：偉大なる大日霊女女王（^{イトヨリメノミコト}）の死後、相続で一族争いがおきたが、磐礼彦（^{イワレヒコ}）が吾平津姫との間に儲け、東遷時に油津に残した台与が女王に擁立されて、争いは収まった（血統的正論。血筋は強し！）。その後、約50年間統治。（③～④：日向系（神話では天孫族）女性統治。但し、「記・紀」により、皇統と血縁関係があり、天孫一系といえなくなるので、日向神話に造作され、

「記・紀」から封印された）

しかし、中国の「倭人伝」と「晋書（唐648）」に記録が残った。当時の指導者と記紀編纂者の目論見は、日本国外の歴史書により外され、今、真実が蘇えった。

■ 16. 日霊女女王の誕生

日霊女の長女多紀理姫が、大国主尊の日向妻として末子相続人：事代主を儲けたが、事代主があまりにも幼年だったので協議の上、日霊女はなるべくして日向の国はもちろん、九州の国々からも共立される形で、名実共に邪馬台国の女王に就任した（日霊女女王、誕生！）。

「倭人伝」【往（いまをさる）七、八十年。倭国乱れ、相攻伐すること暦年（素戔鳴・大歳の九州平定、統治のこと）、及（すなわち）共に一女子を共立して王と為す、名を卑弥呼と曰ふ】。

結局、素戔鳴7～8年、大国主の30年余を合わせて、約40年間、九州は出雲系の統治下にあり、かつ善政が行われ住民からも尊崇された。その為、西日本の多くの氏神は、素戔鳴を中心とする出雲系で、八坂神社、牛頭神社、大国神社、南方神社、九玉（^{クダマ}興玉）神社、熊野神社などの祭神として祀られ、また、鹿児島県の神社（九玉＝興玉神社、南方神社、他）の祭神も出雲系が多い。

と言う事は、日向の天孫系（神話仕立て）の大和王朝より早く、出雲王朝は成立して、西日本一帯（大和も含む＝後述）を統治して善政を行った、という事を示している。神話（即ち、神そのもの）と繋がるように造作した天孫一系の「記・紀」編纂者にとっては、何としても消し去りたい史実であった。

日霊女女王の話に戻るが、日本では、昔から神に仕える巫女という神職があり、女王「日霊女」と聞いた陳寿が中華思想を働かして、「卑弥呼」という蔑視文字をあて、知ったふりして【鬼道に事（つか）え、能（よ）

43

ある。「記・紀」は、それを穏便な「国譲り」神話に仕立てた。また、「記・紀」編纂後、鎮魂（素戔鳴と大国主への怨霊除け）のため、現在の出雲大社も大和政権により建立された。

■ 18. 日霊女の魏国との外交

「倭人伝」【景初二年（239年）六月、倭の女王、大夫難升米^{ナンシヨウメ}、他を遣わし、京都^{ケイト}＝魏の都；洛陽に詣らしむ】。

【親魏倭王卑弥呼^{セイシヨウ}に制昭す（皇帝の親書を渡す）】。

昭書（明帝の親書）をして倭の女王に曰く、【今汝を以って親魏倭王と為し、金印紫綬を仮し、（中略）金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、（中略）を賜り、（中略）故に鄭重に汝に好物を賜うなり】。

遠国の女王国がはるばる忠節を誓って、洛陽まで訪ねてきたことを、明帝が非常に喜び、使者を饗応し、帰りには持って行った贈り物の何倍もの下賜品を持たせた。実は中華の国は、朝貢品の何倍もの品を下賜するのが通例だった。但し、文書中にある銅鏡百枚はよく言われる三角縁神獸鏡^{サンカクフチシンジュウキョウ}ではない、今までに500枚以上出土し、すべて倭国製。中国製は一枚も発見されていない。そろそろ三角縁神獸鏡の呪縛から脱すべきだと思う。

■ 19. 大和の大歳→饒速日 →天照国照大神

父・素戔鳴と九州平定を行い、武勇の誉れと称えられた出雲の大歳は、その後部下と共に大和平定に向かい、大和の有力豪族・長髓彦^{ナガスネヒコ}の妹の三炊屋姫^{ミカシギヤ}を娶り、大和を無血平定した。この時に饒速日と改名。その後、約30年間、大和の最初の統治者（出雲系）となり、善政を行ったので天照国照大神^{アマテラスクニテラスオオカミ}と尊崇された。

子供は3人、末子相続人は伊助依姫^{イスケヨリ}であつたが、まだ幼かったので、長男の宇摩

志麻治^{シマチ}が政務を代行した。

約500年後の「記・紀」の編纂者（天孫系）が、最初の国史である「記・紀」に天孫族一系を記録に残すため、この出雲系の最初の大和の統治者・饒速日を歴史から消そうと、神話を造作したり、古社の古文書や系図を没収したり、祭神の名前を変えさせたりと、苦心惨憺した。

大和統治を要約すれば、次のようになる。

初代：饒速日＝天照国照大神（出雲・蒙古系の名前は布留）→二代目：幼い伊助依姫；長男の宇摩志麻治^{ウマシマチ}が政務代行、約20年間。（三代目は、出雲と日向の政治的大同団結一日霊女女王の采配一が成り、日向の磐礼彦が伊助依姫の養子に入って、神武即位が成立した。これが神武東遷である（後述））。

饒速日大王を祀る主な神社：大神（三輪）神社（図24）、石上神宮、大和神社＝大和三大古社。さらに、天津の日吉神社、京都の上賀茂神社、和歌山の熊野本宮神社、など日本有数の由緒ある古社は、その祭神がほとんど出雲系である。



（図24）饒速日→天照国照大神（大物主）を祀る磐座様式の三輪山

（全④－4＝最終回へ続く）

引用文献：全④－1に掲載済みですが、最後（全④－4）にもう一回掲載します。

また本稿は、鹿児島史談会：2022年11月例会で著者が行った講演を、一部改変・編集し直したものです。